

日本人はどのように意見を述べるのか

——日米の「グループの中で意見を述べる」

談話の対照分析から——

上田安希子

キーワード： ディスカッション、フレーム、ミスコミュニケーション、あいづち、協働

1. はじめに

今日、多くの場面で、「日本人はディスカッション、ディベートが苦手だ」、とか、「人前ではっきりと意見を言うのが苦手だ」と指摘されている。異文化間コミュニケーションなどの分野でも、日本人が欧米流のディスカッションやディベートを経験して、戸惑う、コミュニケーションに失敗するという事例の報告が多くある。逆に、欧米側からは、日本人は「あいまいだ」「はっきりと自分の意見を言わない」などと指摘されており、こうした例から見ても、「自分の意見を主張する」という言語行動をめぐる、よく日本人と欧米人の間に誤解がおきているということは誰もが知ることである。

しかし、日本人は「本当に意見を言うのが苦手」で主張が「あいまい」なのだろうか。実際に日本人は、ことばを使うことによって、日常的な取り決めをしたり、自分の考えを人に伝えたりしている。そのとき母語話者同士は不自由を感じたり、あいまいだから何を言っているのかわからないということはほぼないのである。そう考えると、日本人と欧米人との間にミスコミュニケーションが起こる理由は、「意見を言う」ということに関し

て、もともと同じような意図をもった言語行動を、両文化で違ったやりかたや枠組みをもって行なっているからではないか、と推察される。

Watanabe (1993) は、Tannen (1993) らによって提唱された「フレーム」という概念を用いて、実際の日米のディスカッションの談話を比較、分析し、それぞれのディスカッションのフレームには文化的に相違があることを示し、そのようなフレームの違いが異文化間ミスコミュニケーションの原因と深く関わっている可能性を示唆した。本稿では、日本語と米語のグループの中で意見を言う談話データを用いて、特に Watanabe (1993) が明らかにしたフレームのうち *arguing*、つまり議論のしかたに焦点を当て、両言語の話者が「グループの中で意見を述べる」という言語行動に対して持っている期待の相違が、個々の発話の特徴とどのように関わっているのかを考察したうえで、日本人にとって「グループの中で意見を述べる」ということはどのようなことなのかを探る。

2. 先行研究

異文化間のミスコミュニケーションが起こる原因に関して多くの研究がなされているが、その解明に有効な概念として *frame* の存在が指摘されている。(Gumperz 1982, Goffman 1986, Tannen 1993)。Tannen は、フレーム (*frame*) とは、「ある言語行動を行なう際にそれをもとに状況を解釈したりそれに基づいて行動(発話)したりする一連の期待の構造 (*sets of expectation*)」と述べ、この概念が人間の相互行為(インターアクション)としての談話行動の分析に有用であると主張した。Watanabe (1993) は、この Tannen の注目したフレームの概念を、異文化間のミスコミュニケーションの原因を解明するための一つの枠組みとして用い、日米のグループディスカッションの談話を比較し、そこから得られた両文化で共有されるフレームの違いがコミュニケーションの問題を引き起こす可能性を示唆した。

その結果によれば、以下の3つの点において日米のグループディスカッ

ションの談話は異なるフレームをもつ、と Watanabe は考察している。

- (1) beginning and ending phases (談話の開始と終わり)
- (2) presenting reasons (理由の提示)
- (3) arguing (議論)

まず、談話の開始と終わりの局面での違いである。開始の局面で、日本人グループは必ず、役割分担や話す順番を相談し、誰が最初に話すかなどをさぐってから発言し始めるのに対し、アメリカ人グループにはそのような始め方は見られなかった。また、ある意見の理由の提示において、日本人は「語り (storytelling)」のような形で語るのに対し、アメリカ人グループは、論理的に一貫した理由の提示をする傾向がみられた。また、議論の仕方であるが、日本人話者は “multiple accounting argumentation strategy” を用い、あるときは反対の立場に賛同したりといった、どちらかというと首尾一貫しない述べ方をするのに対し、アメリカ人グループは “single accounting argumentation strategy” を用い、一つの立場に立って一貫して述べるという傾向がみられた。これを Watanabe は、アメリカ人グループの arguing frame は “exclusive” であるのに対し、日本人グループの arguing frame は “inclusive” である、と考察した。

このような日米で対照的なフレームは母語話者の直感に合致するものであり説得力があるが、では、その異なったフレームの中で、個々の参加者は実際どのように意見を述べていくのだろうか。

フレームが異なれば、異なった談話の型が観察されるはずである。そのような仮説をもとに、本稿では、グループディスカッションの中で、特に「意見の言い方」に焦点を当てるため、データとして、全体を通じてあるひとつのトピックについて賛成か反対かをグループで話し合うタイプの日本語と米語の談話を収集し、それぞれの談話にどのような特徴がみられるかを分析する。そして、それらの個々の談話的特徴がそれぞれ両文化におけるどのようなフレームを示しているかを考察していく。

3. データ

4名(男女2名ずつ)の参加者を含む、アメリカ人のグループ2組と日本人グループ3組に、紙に書いたトピックをそれぞれ与え、10分～20分程度でディスカッションをしてもらい、それを録音した。¹

日本人グループトピック：「日本人は、フランス語やドイツ語などの西欧語を話す人々と比べて英語を習得するのが難しいという考えがあるが、これに賛成しますか。なぜですか。」

アメリカ人グループトピック：“Many people say that, for Americans, Japanese is hard to learn compared to European languages. Do you agree or disagree?”

収録時間は日本語計48分、米語計27分で、分析には文字化した資料を使用した。²

4. 分析

本稿の日本語のディスカッションのデータを、特に個々の発話のレベルで米語データと比較した結果、日本語ディスカッションには下の2つの現象が多く観察された。

- 1) 頻繁に打たれるあいづちとそれに伴う発話の打ち切り
- 2) 複数の参加者が一つの発言を協働して作り上げる現象

これらの発話の特徴的な現象については、以下に具体的にデータを参照しながら結果を示す。

4.1. 頻繁に打たれるあいづちとそれに伴う発話の打ち切り

あいづちの定義は様々な研究者によってなされているが、本稿では、「はい、ええ」「uh-huh, yeah」など、発話自体に賛成や反対などの命題を含まないもの(Iwasaki 1997による‘non-lexical backchannel’)を対象とし、「そうですね」や‘That’s right’など、相手の話の内容に積極的に同意する命題内容をもつ発話は対象外とした。また、音声のみの録音データを分析

対象とするため、ここでは笑いや頷きなどの非言語行動も対象外とした。

表1は本稿の日米語ディスカッションのデータにおけるあいづちの頻度の比較である。

多くの研究者たちによって、日本語の会話には他言語会話に比べてあいづちの頻度が多い、ということが指摘されている (Kita and Ide 2007, Maynard 1986) のは、広く知られていることであるが、本稿のデータのディスカッションでも同様の結果がみられた。この結果を見ると、ディスカッションの中で、日本語話者は米語話者より、あいづちをはるかに多く打つということがわかる。

さらに、このあいづちの生起箇所をよく見た結果、特徴的に表れたのが、それに伴う発話の打ち切りである。これは、聞き手の参与者の肯定的なあいづちが伴うと、話し手が発言を不完全なまま打ち切るという現象である。例1はそのうちの典型的なものである。

(例1)

- 01 JF3: そこには言及してないの?
 02 JF4: 文字がさあ、[日本語はやっ… [とさ、で、
 03 JF3: [うん
 04 JM3: [あー
 05 JF4: アルファベットじゃない＝ ＝フランス語やドイツ語
 06 JF3: ＝うん＝
 07 JF3: アルファベット覚えんのは苦労しなかったけど別に… {笑}

03で、JF4は、「文字が違うから、やはり日本人にとって英語は難しいのではないか」という意見を「文字がさあ」という非常に短い発話によって提示し始めるが、それに続く「日本語はやっ…」という発話に重ねてきた

表1 日米語のディスカッションにおけるあいづちの頻度

	日本語	英語
生起数(回)	416	114
会話時間(分)	48分	27分
頻度(回/分)	8.8	4.2

JF3の「うん」というあいづち、さらにその直後の「(あ)とさ、で…」と言う発話に重ねてきた JM3の「あー」という長いあいづちにより、発話をそこで未完結のまま終わらせている。JF4は、「文字が」「日本語はやつ(ぱり)」といい始めただけで、その続きとして予想される「違うから」という部分は全く言わずに終わっている。これは、JF4が「文字がさあ」と言い出しただけで、他の二人の参加者はJF4が「日本語は西洋語と文字の体系が違っており、だからそれによって難しい」という意見を提示するのだ、と誰もが理解し、その理解があいづちにより示され、JF4は自分がこれから言うことを皆が理解したと感じたため、先を続ける必要がないと判断したからだと考えられる。JF4はこのような例—ほぼ1語発しただけで、聞き手のあいづちが伴い、理解されたと感じ、話し手が発話を不完全のまま終わらせる—という例は、米語にはほとんど観察されなかった。したがって、これは、日本語のディスカッションに典型的に現れる談話の現象であると言える。

米語のディスカッションでは、日本語ディスカッションに比べてあいづちの打たれる頻度ははるかに低い。例2は AM1が、「ある人が、ひとつの言語で fluent に話せるといえるためにはその言語のあらゆる主要な小説を読んでいることだと言った」ということを語っている場面であるが、

(例2)

- 01 AM1: yeah {laugh} but he, he was saying that eh
 02 that he was talking to that woman right? And She said that
 to fully
 03 to be able to fully comprehend a language or be able to say
 that you are
 04 totally fluent in a language, uh, the, the only way to be able
 to safely
 05 say that was to have read all the major novels
 06 of that language =
 07 AF2: = uh hum

- 08 AM1: and he said um you know she, she, she was, she, she, he said,
 09 well if I had, if that he said that if I had to do that it would
 take me
 10 like five years and maybe I'll do it and she said oh, I did it
 one
 11 well, her language was Spanish and you know with the
 original alphabet
 12 and all that so it was very easy for her to do that

明らかに長い AM1 による発話 (01~12) の間に、聞き手 AF2 が打っているあいづちは一回 (07) だけである。米語のあいづちは、ある程度の長さを持つ話し手の情報提供の後に打たれ、頻度も日本語と比べて非常に低い。米語会話においては、話し手が発話権を持っている間は、聞き手はその発話権を侵害しない程度にじっと聞き、まとまりのある発話の区切りが見えたところであいづちを打つことが、ディスカッションにおける適切な態度だとみなされていると推察できる。

逆に日本語のディスカッションの場合は、相手の発話がまだまとまりをもつ区切りも見えていないのに、まさにその断片ごとに、あいづちを打つ。これは明らかに米語の聞き手のあいづちの打ち方と異なっている。特に、例2のようにあいづちに発話の打ち切りが伴う現象を見ると、聞き手の打つあいづちは「補助的な」ものではなく、意見を述べる話し手にとってむしろ必要なものなのではないかと思われる。聞き手のあいづちが、話し手が予測しているように入るからこそ、話し手は意見を言い続けたり、逆にもう言う必要がないと判断して打ち切ることができるのである。日本語のディスカッションにおいては、誰かが話し始めたとき、他の参加者はただそれを聞き、賛同するだけの「聞き手」であるのではなく、むしろ、話し手の語り、さらには話し手の思考過程に入り込んで、共に話し手の発話を作り上げていっているとみることはできないのではないだろうか。

4.2. 複数の参加者が一つの発言を協働して作り上げる現象

水谷(1993)は、欧米型の会話は、「二人の話し手がそれぞれ自分の発話を完結させてから相手の話を聞く形で、聞き手は話し手の文ないし発話が完結するのを黙って待つ」のが基本であり、二本の線で表せる会話になっているのに対し、日本語の会話は、あいづちを頻繁に打たせたり、未完成の文を引き取って完結させたりすることが多く、一本の線のようになる会話であると指摘した。そしてこの日本語の「一つの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていくという考え方にもとづいた」話し方を「共話」と呼んでいる。本稿の日本語ディスカッションのデータでも、このような「共話」的な、一つの発言を複数の参加者が協働して作り上げる現象が多く見られた。³

例3は主に二人の話者により、同じ語を繰り返したり、相手の発話を引き取って続けたりする現象が何度もおこっている部分である。

(例3)

- 01 JM6: ドイツ語と英語だって フランス語は [フランス語は
 02 JM5: 語源一緒 [だもんな [フランス語は
 03 JF5: [そうですね

 04 JM6: フランス語は 単語は
 05 JM5: [違うけど ラテン語で [違うけど 単語は
 06 JF5: [あ でも、 [や、でも

JM6が「ドイツ語と英語だって」と切り出したのを受けて、JM5がそのJM6の発話の後半を補うように「語源一緒だもんな」と反応して発話している。また、JM6が「フランス語は」と切り出したのを受けて、JM5は「フランス語は」と繰り返して後半の「違うけど」を加えている。さらにまた04後半部でJM6が「単語は」と切り出したのを受けて、JM5が「単語は」と繰り返している。また、その二人の協働発話が進行するのと同時になされているJF5の発話も、JM6、JM5の二人の協働発話に対する肯定的

反応として、ぴたりと寄り添うように絶妙なタイミングで重ねられている。

例 4 も、ある話者の発話を引き取ることにより 3 人の話者が JM1 の発話を一緒に作り上げているのが観察される例である。これは、どの言語を話す人々が語学習得能力が高いか、という話題から中国人の語学習得能力の高さに話題が及んでいる場面である。

(例 4)

- 01 JM1: でなんかジュディオングが 20ヶ国語しゃべれるとかいってさ
 02 JF1: まそれは一
 03 JF2: あー
 04 JM1: あの 20ヶ国語のうち何ヶ国語までがその
 05 JF1: 北京語 とか
 06 JF2: [はいはい [**語とか…
 07 JM1: [そうだよ

04 で、「(ジュディオングが話せるという) 20ヶ国語のうち何ヶ国語までが」と切り出した JM1 に対し、JF1 はまさに絶妙なタイミングで発話を引き継ぐ形で「北京語とか」(05) と発話し、さらに JF2 は「はいはい」とまるで、言いたいことはわかる、と言わんばかりに「**語とか」と続けている。そして、注目すべきはこの二人の発話の引き取りを受けて、この発言を切り出した JM1 が「そうだよ」と再度反応している(そしてこの「そうだよ」は JF2 の 06 の「**語とか」とオーバーラップしている)ことである。ここでも、04 → 05 → 06 と発話されたことだけでは、内容として不完全であるが、「あの 20ヶ国語のうち何ヶ国語までが北京語とか**語とか…」の時点で、切り出した側の JM1 は発話を続けず、そこで「そうだよ」と反応することで打ち切っている。おそらく発話を続けたとすれば「北京語とか**語など中国の方言(非常に異なっているのでまるで別の言語のようにみられることもあるから)が含まれているのだろうか」と言ったのであろうが、それはこの後の部分でも全く言及されていない。これもまた、前項のあいづちのところでもみた例と同様、別の参加者の反応に

よって、自分の言おうとしたことがもう理解されたと判断したことによる発話の打ち切りであると理解されよう。このように、複数の話者が一つの発言を引き取って続け、協働で発話を構成する例は日本語で非常に多く見られたことから、日本語の「グループの中における意見の述べ方」として典型的なものであるとみることができる。

一方、米語の例を見てみよう。本稿の米語データには、このように協働して発話を作りあげる現象はあまりみられなかった。非常に類似している例はあるが、さきに見た日本語の例とはかなり異なっている。例5は、AM1が、級友の1人の発言に言及しようとして、その友人の名前が出てこない(かまたははっきりと名前を言いたくない)ので、「Boredom 氏だっけ? 誰だっけ?」と茶化したニックネームを探していると、AM2が“Oh, Mr. Personality?”と発話を引き継いでいる場面である。

(例5)

- 01 AM1: a {laugh} n yeah, I I mean it was like that guy that
talked to us
02 that first day
03 Mr. Boredom? or Mr. [Wonderful or ... = yeah, Mr.
[Personality, yeah
04 AM2: [Oh, Mr. Personality? =
[Mr. Personality

この AM2 は、AM1 が思い出せず言葉を探しているところに、思い出した AM2 が補ったものであり、さきほどの日本語の例3、例4の例で見たような、AM1 がまさに言おうとしていることを絶妙なタイミングで AM2 が先取りしているというものではない。あくまで AM2 という話し手に対し、聞き手として AM2 が反応しているだけであり、さきほどの日本語の例(例3、例4)とは明らかに異なっているといえる。

5. 考察

本稿で観察された日本語ディスカッションにおける特徴である、1) 頻繁に打たれるあいづちとそれに伴う発話の打ち切り、2) 一つの発言を複数の参加者が協働して作り上げる現象、はそれぞれ「グループの中で意見を述べる」という言語行動のとらえ方とどのように関わっているのでしょうか。

前項で見てきたように、あいづちと発話の打ち切りや、複数の参加者が協働して発話を作り上げたりする現象が多くみられる日本語ディスカッションにおいては、参加者たちは、別々の主張を持った3人が順番に意見を述べあうとか、誰かが話し手となりそれを聞き手が助けているということを前提としているのではなく、むしろ、どの参加者も、共に考え、協働して発話をつなげていきながら一緒に考えていくということが前提とされているように思われる。これに対して、あまりあいづちを頻繁に打たず、一人の話者がする発言はそれぞれ完結されることが多い米語ディスカッションにおいては、参加者たちは、それぞれ個々の考えをまず持った上でそれを出し合い、交換しながら考えを深めていくことが前提とされているように思われる。あいづちを頻繁に打つことにより一人の話者の発言を侵害することなく、話し手を個として聞き手が尊重し、あくまで聞き手として反応する。そこに前提とされているのは、それぞれの個人の意見の違いであり、個々の発話権の尊重であると考えられる。

このようなことをふまえ、両言語において「グループの中で意見を述べる」ということは一体何なのかを考え、図示したものが図1である。

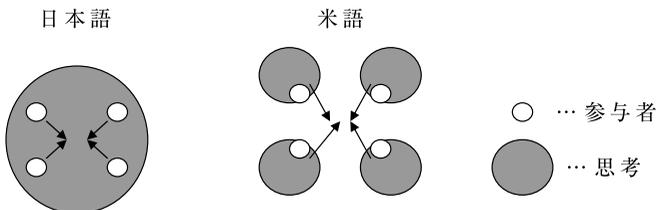


図1

参加者同士がお互いの発話権を侵害することなく、完結した発話を個々の参加者がそれぞれ述べる米語ディスカッションは、個々の話者がそれぞれの思考を別々に持っており、その思考をことばにして場に出し合うというモデルでとらえることができる。それに対して、頻繁に挟まれるあいづちにより話者が発言を不完全なまま打ち切ったり、参加者同士が協働して発話を作り上げたりする日本語ディスカッションは、皆で共有するひとつの「場」または「思考空間」の中に参加者がまず入り込んで、ひとつのディスカッションという談話を共に作り上げていくモデルでとらえられよう。日本語のディスカッションでは、それぞれの参加者たちは、共に発話しながら、議論されているテーマについて意見を構築していく。それが日本語において最も慣習的に行っているグループの中での意見の述べ方なのではないだろうか。

井出(2006: 188-189)は、西欧語と様々な点で異なる日本語の現象を考察する中で、日本社会を捉えるために有用ないくつかの考え方を紹介している。その一つが濱口(1982)による「間人主義」である。それは、濱口が、「個人主義」に対する概念としてよく使われる「集団主義」に代わるものとしてとらえている考え方で、人と人との間に視点を据えた人々の行動のタイプとして提唱している考え方である。井出はさらに、以下のようにこの間人主義の話し合いを例を挙げて説明している。

…間人主義の話し合いは、日本でよくみられるのでだれもが思い当たるものであろう。まず「どこに行こうか」と発話している時に3人は各々に明確な A、B あるいは C という目的地の候補を持っていないことが多い。「A がいいけど B もいいかな」というようなあいまいの意思を持っていることが多い。従って、ある候補地に対して、賛成あるいは反対をするための分析的意見は持たない。どちらともいえない、といったあいまいの考えを持っている。そして、あれやこれやと話し合っているうちに、なんとなくその場の雰囲気や候補地が一つに絞られることになる。話し手たちは最初から A、B、または C というようにはっきりとした意思を持っていないことが多いので、(議論で

はなく)話し合いはのりくりして多少多くの時間を費やすことになってきたとしても、決まったことを受け入れなければならない痛みは回避される。

濱口に言わせると、冗長になりがちで、不透明で、非論理的な間人主義の話し合いは、最初から明確な意思を持たないので、自分と異なる考えを受け入れなければならない時の葛藤、つまりコストがなくて済むので、それなりに引き合っている合意形成の方法である。

(井出 2006: 188-189)

さきに述べた、米語ディスカッションとの比較で明らかになった日本語ディスカッションの談話的特徴は、まさにこの間人主義の日本社会の話し合い方を反映しているのではないだろうか。あいづちを頻繁に打ち、それによって理解がなされたとわかると発話を不完全なままで打ち切ったり、参加者たちが協働してひとつの発言を一緒に作ったりすることが多くみられる型を持つ日本語ディスカッションは、それぞれの参加者は「賛成または反対をするための分析的意見を持たない」が、「あれやこれやと話し合っているうちに」結論が絞られてくるタイプの間人主義の話し合いにちょうどびたりと合う話し方であるように思われる。

参加者それぞれが個として向き合い意見交換をするのではなく、「話し合い」という場、または共有する思考空間の中に参加者が皆入り込んでひとつのディスカッションという談話を作りその中で一緒に考えていく、このような話し合い方が日本社会のインフラを支えてきたのであり、日本人にとって慣れ親しんできたものであったとすれば、欧米流のディスカッションを経験した日本人が戸惑いを感じることは当然であろう。

6. おわりに

井出 (2006: 235) は、「科学の世紀といわれる 20 世紀に続くこの 21 世紀の課題は、地球上で人々が共生できる道を探ることである。違う文化を理解するには、どこが同じで、どこが違うかを明らかにする必要がある。」と述べる。言語使用の文化的相違を解明しようとする研究は、我々が地球

上で生きていくために今こそ強く求められているものといえよう。

本稿では、日米語のディスカッションの談話を比較し、あるトピックに対して意見を述べるディスカッションの談話には両言語で異なった特徴が観察されることを指摘した。そしてそこから、日本語と米語において、「グループの中で意見を述べる」という言語行動は、米語においては、個々の話者がそれぞれの考えを持ち、その考えを場に出し合うことであるのに対し、日本語においては、皆で共有するひとつの「場」または「思考空間」の中に参加者がまず入り込んで、ひとつのディスカッションという談話を共に作り上げていくことであると考察した。

フレーム (frame) とは、「ある言語行動を行なう際にそれをもとに状況を解釈したりそれに基づいて行動(発話)したりする一連の期待の構造 (sets of expectation)」のことである (Tannen 1993)。本稿が示した日米の「グループの中で意見を述べる」談話にみられる特徴の違いは、それぞれの文化で共有されているフレームの違いとみることができる。日本人は意見をはっきりと言い表すのが苦手だ、日本人の主張はあいまいでわかりにくい、などの指摘が欧米側からよくなされていることにはさきに触れたが、同じ「グループの中で意見を述べる」という言語行動に対しこのように違ったフレームがそれぞれの文化で共有されており、やり方が異なっていることから考えると、たとえば日本人が欧米人と接触して意見を述べる場面に出くわした時にミスコミュニケーションが起こるのは当然であろう。

今後は、「意見を述べる」という言語行動に、このような文化的相違がなぜ存在するのか、社会的、文化的、歴史的背景などさまざまな観点から考察を深めていくことを課題としたい。

付言

本稿は、第112回日本言語学会大会(麗澤大学)で口頭発表した内容に大幅に加筆・修正を加えたものである。

註

- 1 データ収集の詳細は、以下の通り。

日本語：1996年5月、東京近郊の大学内の教室にて収集。

参加者はいずれも大学院生。お互い顔見知りか友人。

米語：1994年9月～11月にかけて東京都内の大学内の教室で収集。

参加者はいずれも日本に留学中のアメリカ国籍をもつ大学生または大学院生。お互い顔見知りか友人。

調査の目的は「日常会話に関する調査なので、内容はあまり関係ありません。普通に話をしてください。」と伝えるだけで、実際の目的は告げずに行なった。

2 文字化表記法について

JM	日本人男性	=	ラッチング
JF	日本人女性	{笑}	笑い
AM	アメリカ人男性	?	上昇イントネーション
AF	アメリカ人女性	*	聞き取れない発音
[オーバーラップ		

3 落合・植野・野村(2004)は、日米語の自由会話のデータを比較し、日本語の会話には米語会話に比べてはるかに多くの「繰り返し」(相手の発話をそのまま、或いは、部分的に繰り返す行為)がみられ、それは米語に比べてはるかに「即行・密着的」におこり、「二者が協働して互いの距離を縮め、会話の「場」を盛り上げながら、同調に向かっていく過程」(同上: 36)がそこに現れていると分析している。

引用文献

Gumperz, J. J. 1982 *Discourse strategies*. New York: Cambridge University Press.

Goffman, E. 1986 *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Northeastern University Press (de.) Reprint. Boston: northeastern University Press.

濱口恵俊 1982 『間人主義の社会日本』東京：東洋経済新報社

井出祥子 2006 『わきまへの語用論』東京：大修館書店

Kita, Sotaro and Sachiko Ide 2007 Nodding, aizuchi, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships. *Journal of pragmatics* 39. 1242–1254

Maynard, Senko K 1986 On back-channel behavior in Japanese and English conversation. *Linguistics* 24. 1079–1108

———. 1989 *Japanese conversation: self-contextualization throughout structure and interactional management*. Norwood, NJ.: Ablex Pub.

水谷信子 1993 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』第12号。4–10

落合るみ子・植野貴志子・野村佑子 2006 「日本語会話における同調促進装置としてのあいづち、繰り返し、テイクオーバー：米語会話との比較から」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第12号。29–41

Tannen, Deborah 1993 *Framing in discourse*. New York: Oxford University Press.

Watanabe, Suwako 1993 “Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions.” *Framing in discourse*, ed. by Deborah Tannen, 176–209. New York: Oxford University Press.